エコホテルで泊まった部屋。窓ガラスは二重になっていて、さらに壁厚は60センチ以上あるので、断熱防音効果は高い。

前方の高架がにA1号線。

１２．コプリフシティツァ（Копривщица）ディミタール

明けて21日も高曇りの穏やかな朝を迎えた。8時に早々朝食を済ませたが、コプリフシティツァまで送ってくれるディミタールとの約束は11時だ。それまで部屋のベッドに寝転がり、「隠れていた宇宙」を読む。彼のことだから早めに来るだろうと、思い、10時半になり支度を整ると女将に別れを告げ、待ち合わせ場所へ向かう。橋を渡ってすぐのところで、食堂ボダポダ前辺りになる。

10時45分だったが彼は既に到着し、車の前に佇んでいた。その後ろ姿に、ドブロウートロと声をかけると、振り向いて挨拶が返ってくる。だいぶ待ったのか訊いたところ、「今着いたばかりで、車を降りて新鮮な空気を吸っていたところだ。」と返事するが、多分かなり早めに着いたのに、負担を感じさせまいと慮ったようだ。

ともかくカバンをトランクに収め、コートを後部座席に投げ込み、助手席乗り込んで足許にカメラバッグを置く。シートベルトを締めて体勢が整ったところで、ディミタールは車を発進させた。

彼の車はトヨタカリーナで、15年も乗っているがトラブルなしだという。運転振りも丁寧だし、整備などもきちんとして大切に扱っているのだろう。

車は一昨日通過した記憶の残る山間道路をアセノヴグラトまで北上し、広々した幹線道路に出る。20分ほどで市街地に入った。一昨日のルートに関する記憶は既に役に立たなくなっていたが、プロヴディフであることは間違いない。そのうちネベット・テベ遺跡から遠望した高層ホテル・マリツァの足許を通過する。市街の西部を北上し、新市街に入ったようだ。

間もなく郊外に出ると、ソフィアと西部地方を結ぶA1号線の下をくぐる。カルロボへと通じる66号線は相互一車線だが、起伏は全くない上にほとんど直線で、おまけにそれぞれの車線がほぼ二車線分ある。それでいて交通量は少ないから日本の高速道路を行くより余程ゆったりした気分でドライブを楽しむことができた。

66号線。

二人でドライブしていれば、どうしても饒舌になるようだ。共通する話題があまりないので、旅の話から始まりなぜ割高でもタクシーを利用するのかを、実体験から説明した。ガブロヴォで危うく乗り継ぎ損ねそうになり走ったことや、カザンラクからのマイクロバスで満員になり、持ち込んだカバンのせいで肩身の狭い思いをしたことなどを、拙い英語で何とか臨場感を高めようと、ときには身振りも交えて語った。何とか意味は通じたようで、ディミタールのコメントは、「そんな苦労も含めて、旅の楽しみじゃないか。」と、なかなかセンスが良い。こんな聞き手がいれば、おのずと話も弾む。

一昨日の朝、話題に上った、「タクシー替わりにガイドを．．．.」の話を蒸し返すと、ディミタールは、「この時期はオフシーズンなのでガイド達も暇だが、もし頼むならば別に良い男がいるのを思い出した。」と、思わぬ展開になった。

パトリックという青年で、ヴァルナの近郊に住んでいるらしい。東部の旅は終わったつもりでいるから、この点はマイナスだけれど、ブルガリア全土を対象とし、どこでも車で駆け付けガイドしてくれるそうだ。ともかくディミタールがパトリックからメールするように手配してくれることになった。3日前に名刺を渡してあるので、メールアドレスはそれを参照して貰う。

カルロボの街外れ。間もなく66号線から6号線へ左折し、街の中心部へは行かなかった。

ディミタールの英語は達者なもので、母語ではないにしても英会話学校仕込みとは思えなかった。話題が途切れたときに訊いてみると、案の定で米国の大学に留学し、卒業後も数年向こうにとどまっていたとのことだ。ちなみにどこの大学だったかも教えてくれたが、私の英語耳では拾うことができなかった。

12時7分にカルロボを通過。左折して6号線を西へ。12時半に6号線から左折し南下を開始する。数分で鉄道を跨線橋で渡る。コプリフシティツァ駅が垣間見えたが、駅舎を別にすれば辺りに人家など皆無だ。駅に電話がなく、携帯電話も通話可能範囲外だということも納得がいった。

それから10分ほどで牧草地や畑が見え始め、やがて家々も。村に近付いていることが判る。間もなく村の中心部とおぼしき広場があり、そこに駐車した。

6号線。ローカル道路との交差だが立体になっていた。

コプリフシティツァの家並み。

コプリフシティツァは中央部をトボルニツァ川が南北に流れ、平坦なのは川沿いのごく限られた土地だけだ。後はほぼ一様の緩い傾斜で両側にせり上がっている。早い時刻に着けることと、ディミタールが一緒なので宿の予約はしていない。英ガイドのお奨め宿から気に入ったところを選び、平面図の宿記号脇に優先順位に従い番号を4番まで書き込んでおいた。

これをディミタールに見せる。一番目の宿は広場から50メートルくらいのはずだ。彼と並んで坂を登った。しかし目指すトラヤノフ・カシュタが見付からないばかりか、地形が地図とさっぱり合致しない。それでもディミタールと一緒なので大船に乗った気分だ。単に言葉の問題を解決してくれるばかりか、こちらの好みなども理解してくれるし、そして旅行業界の人間なのだ。

歩きながら、なぜバスや列車を忌避したかを改めて説明する。「午後遅く着き、暗闇が迫って来ても、今みたいに宿が見付からないままであれば、ブルガリア語のできない他所者はパニックになってしまう. . . .」などと。彼も、「そうだろうな。」と頷いた。

一回りして車に戻り、村の中心線に当たる川沿いを車で移動しながら様子を見ることにした。走り始めて間もなく、ほとんど二人同時に何が間違っているのか気付いた。6号線から左折し南下してきたのに、なぜか北上しているように錯覚し、地図を正反対に見ていた。川を挟んで両側に道路があることも混乱を助長していたようだ。ともかくこれが判れば、すぐに村の中心である4月20日広場に辿り着き、そこから50メートルのトラヤノフ・カシュタが見付かった。大戸が閉ざされ、シーズンオフ休業らしかったが、こうなれば問題はない。200メートルくらいのところにある、第二候補、ホテル・カリナへ転進する。

カリナは川沿い道路に面して大戸があり、開かれている潜り戸から芝生の向こうに建物が見えた。ちょっとしたことだけれど、庭があると何となく豊かな気分になる。ディミタールが先に立ち、一階のホールに入った。オバサンが二人いて、ディミタールが挨拶に引き続きしばらく会話した後、「支度が済んでいないので、部屋はまだ使えないが、選ぶことはできる。」と説明してくれた。

上:ホテル・カリナは大戸とそれに潜り戸が設けられている。中庭の向こうに見える建物で、二階の向かって左が泊まった部屋。下：泊まった部屋からの眺め。潜り戸が見える。

彼と昼食を共にする段取りだったので、それが終わった頃戻ってくればちょうど良い。前夜の客は皆立ち去った後だったから、下見させて貰い庭を見下ろす部屋を選んだ。

4月20日広場に戻り、広場に面している「食堂4月20日」に入る。ガラス窓が多いので内部は明るく開放的な雰囲気だ。全部で50席ほどと思われるが、真ん中辺でガラス張りのパーテーションとドアで仕切られている。ひょっとして奥が禁煙ルームかと思いディミタールに確かめると逆だった。話のついでに訊いたら、彼も以前は喫煙者だったが3年前に止めたそうだ。

オバサンウェイトレスがお品書きを持ってきたところで、ディミタールに（申し訳ないが）私だけ酒を飲ませて貰うことと、できれば料理を分かち合いたいことを提案した。あっさり同意してくれる。彼はスープとブルガリア風ロールキャベツ（ゼレヴィ・サルミ：зелеви сарми）にパン、私はショプスカサラダとレバーの炒め物、赤ワイン（マヴルッド）1壜を注文する。

上：ブルガリア風ロールキャベツ。下：鶏のレバー炒め。

ちなみに執筆にあたり画像を見直したところ、バチコヴォのボダポダ（P.122）やヴァルナのプリ・モナヒナイト（P.50）で飲んだのも同じラベルだった。そんなことはすっかり忘れており、ましてや味わいを関連させて記憶から呼び戻すなど、全く別世界の話だ。

久しぶりに会話しながらの食事は充分に楽しいものだった。しかし話に集中した分だけ料理の記憶が曖昧なものになってしまった。ディミタールに分けて貰ったロールキャベツは、日本のそれと異なり、まず米が入っているし、少量の水を加えてオーブンで焼いたものらしい。香辛料としてはクミンが使われている。

30年も前に、トルコ人の友ジェラル・シュメールに招待され、彼の別荘で昼飯を御馳走になったとき、メインだったのは葡萄の葉で肉や米を包んだドルマだった。トルコでは野菜の葉で包んだタイプのドルマは「巻いたもの」を意味する「サルマ」と呼ばれることもあるらしい。これこそがサルミの原型なのだろう。

レバー料理は、鶏レバーの他にタマネギや、青唐辛子を炒めてからこれもオーブンで焼くようだ。レバー好きのせいもあるが、添えられたレモンを搾って食べるとさっぱりして美味いし、ワインとも相性が良かった。

1時間弱で食事を終える。勘定は、ショプスカサラダ3.5Lv(192円)、鶏レバー5.5Lv(302円)、ロールキャベツ5Lv(275円)、スープ2Lv(110円)、パン2枚0.3Lv(16円)、ワイン750cc

ディミタールと彼の愛車、トヨタカリーナ。コプリフシティツァにて。

15Lv(824円)。ディミタールから7Lv(384円)貰い、テーブルには35Lv(1,922円)置いた。

財布を出したついでに、車代を精算する。当初の口約束は1キロ当たり1Lv(55円)で、GPSは140キロほどの距離を示している。彼が車のメーターで距離を測ったのかどうかは不明だが、これも当初の話だった120キロ分で良いとまけてくれた。ちなみに20キロの差が出たのはコースの取り方で、グーグルの示す最短距離は120キロだが、カルロボ経由は多少遠回りのようだった。

食堂を出て、カバンを積んだままにしている車でホテル・カリナの前まで行く。この村から次に行くつもりのリラ修道院への移動方法調査を頼んで、改めて別れの挨拶と握手をしてから、彼とその愛車を撮影した。

宿の鍵は先ほど渡されていたので、ディミタールの車が視界から消えると中に入った。経営者の住居は別棟らしく、屋内は静まりかえっている。部屋を再検分してから、宿の共有部分を見て廻る。階段を降りたところの小スペースにPCが置かれ、自由に使用して良いとのことだったので操作してみる。驚いたことに日本語も正常に表示された。PCから受ける印象は、専任の管理者などおらず、経営者の子どもなどが趣味で使用するような感じだ。しかしその子がPCマニアなのかもしれない。

近隣農民の馬車が行き交う。

4時になって買い物がてら近隣を一回りした。観光客らしい人影はなく、学校帰りとおぼしき子供達が多少の賑わいを発しているだけで、静かな村だ。車の往来もほとんどないが、さらに台数は少ないけれど、近隣の農民が馬車で走っているのが印象に残る。

村の中心部には商店が4軒ほどある。食品店で、ウォッカ(Flit 1㍑)12Lv(659円)、ミルク1㍑2Lv(110円)、ポテトチップス85㌘1.5Lv(82円)、トマト1箇0.47Lv(26円)、ナッツ100㌘2.7Lv(148円)を購入。レシートで各金額は判っても、食品としか印字されていないので早めにメモ書きを加える。

村の食品店

村のバスステーション切符売り場。ソフィア、プロヴディフと近隣のピルドップへの三路線があるらしい。

個人ガイド

宿に帰ったが相変わらず無人状態だ。経営者達は、庭を囲む建物のどれかで生活したいるらしい。ともかく同宿者もいないし、気兼ねなさはこの上なく、その一方で庭を通過しなければ宿には入れない構造が安心感をもたらしてくれる。

晩酌を始める前にメールをチェックした。日本からのものはなかったが、ディミタールが云っていたガイド、パトリックからのメールを発見。ディミタールが何時連絡したのか判らないけれど、一別後車の中から電話したとしても3時間半しか経過していないから、具体的な提案をその間にまとめたのは、さすがプロの早業だ。内容は下記コラム参照。

パトリックが提案した旅程（電子メールから拙訳）

前略、私のプライベートツアーガイドサービスにご関心があるようなので、この電子メールを送信しています！ディミタール氏によれば、既にブルガリアの主要な観光スポットのほとんどはお訪ねのようですが、バンスコ、メルニック、リラなどは訪問を希望されているとのことです。

私のサンプル旅程と価格を以下に示します。

11月23日 － コプリフシティツァからピックアップ。 メゼック村に向かいトラキア人の墓（BC4）とビザンチンの要塞（AD11）を訪ねる。メゼック村泊

11月24日 － タトゥル（トラキア人で伝説の歌い手オルフェウスの墓があるとされる）とペルペリコン（ディオニュソスの神殿）を訪問。カルドザリではペルペリコン・ホテル泊

11月25日 － カルドザリの歴史博物館を朝に見学。引き続きズラートグラートに立ち寄り、その後トリグラドとトリグラド峡谷へ。トリグラドのトリブリア・ホテル泊

11月26日 － ドレン村（文化的、歴史的な保護区）を訪問。引き続き ドバルスコ村へ行き、古い教会を訪問。ドバルスコ・ホテル泊

11月27日 － メルニックへ向かい、ロジェン修道院に立ち寄る。メルニックのボリヤーカ・ホテル泊

11月28日 － リラ修道院へ向かう（ブルガリアの最も重要な文化、歴史、建築モニュメントの一つと見なされる）。リルスカ川沿いのゴルスカKATホテル泊

11月29日 － ソフィアへ出発

1人の総価格 －880€

上記に含まれているもの
－ 旅程の調整 － 個人ツアーガイドサービス － 英語を話すガイド － 運転サービス
－ ガソリンのコスト － 宿泊費（すべての宿泊はシングルルームを原則）

上記に含まれていないもの
－ 入場料 － チップ － 食品と飲料 － 旅行 － 健康保険

あなたからのメッセージをお待ちしています。よろしく
パトリック － プライベートガイド。

ともかく一読したものの、判らない地名が多くイメージを掴むことができない。明日の一日はあまりすることもないはずなので、ゆっくり再読吟味することにして、「受信しました。内容を把握するのに時間を要します。改めてご連絡。」みたいな返信を書き、晩酌を開始した。

一夜明け、目を覚ましてからもすることがないままベッドで時を過ごす。8時頃になり玄関のドアを開ける音がしたので、身支度を調え階下に降りる。

昨日のオバサン二人がいた。年格好が似ているから姉妹だろうか。何となく家族経営で使用人はいないように感じていた。適当にテーブルを選んで坐ると、パンとバタやジャムなどが運ばれてきた。（多分）注文を訊かれたので、ミルクコーヒーとスクランブルエッグを頼む。

朝食が終わってから、パトリックの旅程メールを再検討することにした。読んでいるうちに違和感と云おうか、息苦しいものを感じる。その理由を考えてみた。

第一感は、「忙しなさ」だった。今までの

三週間は一つ街や村に二泊から三泊（アルバナシは例外）で移動してきた。パトリックの案は一日に二、三箇所を巡る。しかしそれでも日本のパッケージツアーに比べれば遙かに少ない。もうしばらく考えて、訪問地と宿が全て決められていることが閉塞感の源泉と気付いた。

海外旅行に関しては先々の訪問地を決めず、宿の予約もしないかせいぜい前日くらいにするような旅が9割方で、ほとんどこれが体質化してしまったために、たった六日間でも固定されたことに反発してしまうようだ。ちなみにおかしなことだけれど、日本国内を旅するときには、一週間ぐらいにわたって宿を予約することが多いのだった。

料金の880€(94,725円)は宿泊費を含んで、さらに個人ガイドが自家用車を運転で案内してくれることを考えれば、高くないと思う。しかしそれが意に染まぬものとなれば話が違う。しばらく考えて、相手にも迷惑にならぬよう早く断ることにした。下手な英語でこれまでの旅程概略を書き、「のんびりした旅をしたいので．．．．」ということを理由にしてメールする。閉塞感云々の話は私の英語で説明することなど不可能だ。

その後、11時35分発信のメールで、「そちらの要望に応じ、いかようにも対応できる。」とのことであった。プロとしての自負を感じさせる内容だが、既に書いたように、本当の理由を伝えられるとも思えず、1時23分にただ、「大いに感謝しますが、次の機会に．．．．」とのみ返信した。彼からは15時41分に、「あなたのブルガリア旅行をお楽しみ下さい。」が返信された。「彼と旅したら色々面白い経験ができたかも．．．．」と、ちょっとばかり未練がましい思いが脳裏をよぎる。

10時になって散歩に出かけた。この村における見所は、日・英ガイドによるといくつかのハウスミュージアムだ。しかしアルバナシ、トリャブナ、プロヴディフなどで見物した経験からすればハウスミュージアムはさほど面白いものではない。それよりも雰囲気の良いこの村で路地歩きを楽しみたかった。

村の中央を流れるトボルニツァ川沿いの道を北上する。昨日ディミタールと車で来た道路だ。村全体を俯瞰できるような場所を求めて村外れからさらに5分ほど歩いたが、思うような場所が見付からないまま、道がカーブして村は山陰になってしまう。方針を変更し踵を返した。

上：製作年代は不明だが古風な石橋。下：随所で農耕馬を見かける。

石畳の街路と石積みの塀が続く。

村外の牧草地や畑は道路があっても作業用なので一般に開放されていない。結局村に戻って路地を辿ることになった。地形的には川に向かってほぼ一様に坂をなしているので、高みを求めて歩く分には、どちらへいったものか迷うようなところはなかった。

気温は3℃だが、陽射しがあり風がないため寒くない。街路を辿って行くと、両側の家々はほとんどが煙突から薄い煙を吐き出している。しかしどの家も静まりかえっていて、往来する人の姿はさらに見えなかった。10分ほど坂を上り続けると、家並みが途切れ牧草地に切り替わる。それから100メートルぐらいで林が交じり始め傾斜が緩くなった。

澄んだ青空の下、ハイキングコースが丘の向こうへと延びている。

ハイキングコースの案内看板があり、いくつかのコースが紹介されている。快晴無風は晩秋の今ならば絶好のハイキング日和といえた。もし地図があれば、あるいはA4くらいの略図でも手に入れば歩きたかった。しかし看板の図を記憶して、それに基づき未知の領域を辿るのは危険だし、ましてや方向音痴気味の私が挑むのは無謀というものだろう。

案内図を入手できるならば観光案内所だろうが、4月20日広場にある案内所のブースは昨日ずっと閉じられたままだった。多分シーズンオフは営業しないのだろう。

ハイキングは諦め、振り返ると眼下には谷間全体へ薄く拡がった煙に姿を霞ませた村の家々が見える。此処で生活してみれば厳しい日々も多いかもしれないが、今眺める風景は長閑そのものだった。しばらくの間その場の雰囲気を堪能する。

西側の高台から村を見下ろす。

上：屋根付きの立派な門。下左：門の潜り戸に着けられた南京錠。これによりノブを回転できなくすることでロックしているのか。中から出るときは大戸の閂を内側からはずす？下右：屋根を支える支柱はかなり極端な変形を施されている。

石積み塀も積んだままのもの、目地にモルタルを詰めたもの、それをさらに彫り込んだものなどを見かけた。

気の向くままに道を選びながら坂を下って行く。此処の地形は単純なので、街路もおのずと単調になり、迷路を彷徨い歩くような楽しみはない。それでも半時間ほどかけてトボルニツァ川まで下った。

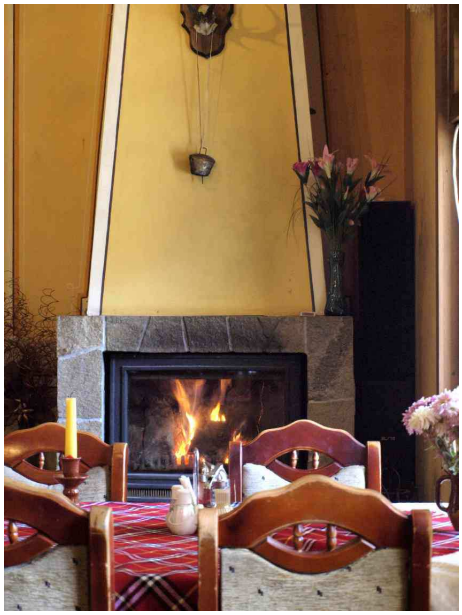
川幅は4メートルくらいで流れは穏やかだが、両岸沿いに薄氷が張っている。緯度的にはカザンラクと同じくらいだが、標高が1000メートルを超えているので、これまでブルガリアを旅してきたところの中では（シプカ峠を除き）一番寒冷地のようだ。

東側の高台から西を望む。

川沿いをしばらく歩き、バスステーションの前を通りかかると、大型バスが停まっていた。時刻的に考えると、12時50分発のソフィア行き長距離バスだろう。ちなみに朝6時45分発と午後4時50分発を合わせ、一日三便ある。ソフィアまでは2時間半の走行だ。村へ向かう便のソフィア発は午前9時、午後1時、午後4時50分だった。

今度は川の東側斜面を登ってみた。視界が次第に拡がり、先ほどのハイキングコース入り口辺りも見える。東側は西側に比べると山が迫り、人家が建ち並ぶ川からの幅は半分ぐらいしかない。その結果、街路などの雰囲気も単調で、あまり面白いところではなかった。半時間ほどで彷徨は終えて昼飯にする。

「食堂4月20日」を再訪した。昨日はディミタールと話すことに気を取られ、あまり店内の様子など見ていなかったが、改めて見廻すと薪暖炉で赤い炎が揺らめいている。暖炉は熱効率の観点からすると甚だしく無駄が多いけれど、雰囲気ということであれば最上だと思う。なにしろ暖かさが視覚的に伝わってくるのだ。この日の先客はオバサン二人で、年格好に差があったから母娘なのかもしれない。昨日と同じ席を選ぶと、オバサンウェイトレスがお品書きを持ってきた。



食堂4月20日広場の片隅で薪暖炉が心地良く燃えていた。。

上：ローストペッパー・サラダ。下：羊飼いのカヴァルマ・コプリフシティツァ風。

サラダはショプスカも飽きてきたし、ローストペッパー・サラダがどんなものか試すことにした。メインは羊飼いのカヴァルマ・コプリフシティツァ風にした。ちなみに、「カヴァルマ（カバルマ）は、専用の小さな土鍋に肉と野菜を入れてオーブンで焼いた料理です。」は、ブルガリア人と結婚したブルガリア在住女性のブログにあった説明。

ワインは昨日と同じ、赤ワイン（マヴルッド）。これを飲みながら待っていると、ローストペッパー・サラダが登場。なるほどその名の通りだ。オーブンで焼いたらしいペッパーにニンニクの小片やディルなどが振りかけられ、オリーブの実と紫タマネギのスライスが添えられている。特別美味いものではないけれど、酒のツマミには良い。

そしてカヴァルマ。土鍋にホワイトソースを満たし、具材は厚切りのベーコンやマッシュルーム、オリーブ、マッシュポテト、豆などが入っている。注文してから10分ちょっとで供されたから、予め下拵えしてあるものを土鍋に入れて焼くのだろう。土鍋の受け皿にはカリフラワーと青唐辛子のピクルスが添えられていた。

厚切りのベーコンは美味かったし、それ以上に煮込んだ野菜を久しぶりにたっぷり食べられるのが嬉しい。難を云えばスープとワインが胃の腑で衝突し、ガブガブになってしまうことだ。ゆっくり時間をかけて食べ進めた。

小一時間かけて全てを完食完飲する。さすがにコーヒーは飲めない。勘定は、ワイン15Lv(824円)、ローストペッパー・サラダ3.5, Lv(192円)、カヴァルマ16Lv(879円)。40Lv(2,197円)をテーブルに置いた。

食堂デュヤド・リベン。1852年に築造された邸宅を使用し100人くらい収容できるらしい。

コプリフシティツァのハウスミュージアム

一眠りし、3時半になって散歩に出た。明朝は早出するので、これが最終の見物機会だから、一応めぼしいハウスミュージアムも訪ねてみるつもりだ。

まず手始めに4月20日広場から坂をちょっと登ったところにあるデベリャノフ・ハウスへ向かう。日ガイドによれば、詩人デベリャノフの生家らしい。しかし彼は幼年時

デベリャノ・フハウスの閉じられた門扉。

門の脇貼られた紙には、電話すればガイドが来るみたいなことが書いてある。

代この村にいたが、ソフィアで成人し、第一次大戦中にギリシャで戦死している。享年29歳。ブルガリアでは人気のある詩人らしく、生家は博物館となり、庭には彼の帰りを虚しく待つ母の銅像、屋内には彼の作品や生涯をたどる展示などがあるそうだ。

しかし辿り着いてみると門は閉ざされている。貼り紙を読めば4月20日広場のミュージアム管理所へ行くか、電話をすればガイドが対応してくれるらしい。しかしもちろん有料だろうし、聞いたこともなく興味のない詩人に関する展示などを見るために、苦手な電話をする気にはなれなかった。

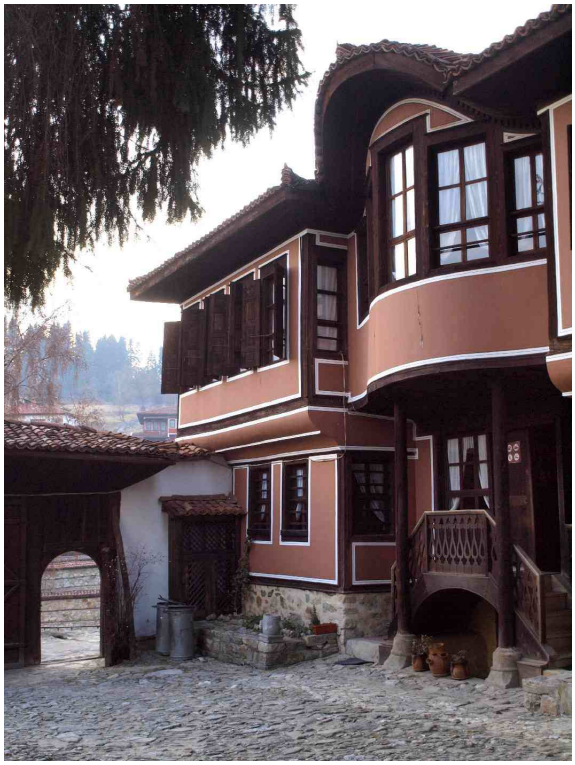
踵を返しわずか行った左手に、オフレコフ・ハウスがあるが、これも門を閉ざしている。そのまま坂を下って行くと、登ってくる現地の女性、その数メートル後ろから日本のガイドブックを手にした若い女性と擦れ違った。ガイドを手配してデベリャノ・フハウスを見に行くところだろうか？ひょっとすると（旅行ライターなどの）プロかもしれない。

ヴェリコ・タルノヴォで聖ペテロ・パウロ教会を便乗見学したように、二人のあとを追うことを一瞬考えた。しかしあの時はブルガリア人相手に旅の恥はかき捨てで済ませたが、若い日本女性の段取りにただ乗りするのは羞恥心も働き自制した。

聖母教会。

オフレコフ・ハウスから南の方へ行くと、指呼の間に聖母教会がある。村の規模に見合った木造のこぢんまりした建物だが、過剰なものがなく、特に鐘楼は瀟洒な姿が美しい。教会の中に入るとオヤジが二人いた。聖職者ではなく信徒でもない、どちらかと云うと寺男とか、修理などに来た職人に見えた。外観に見合った質素なイコノシスタなどを一覧し、短時間の訪問を終える。

教会の南隣にはカブレシュコフ・ハウスがある。ちなみにカブレシュコフ（1851～1876）は革命家で四月蜂起立案者の一人であった。計画がトルコ側に漏れたため、予定の日より10日早く、コプリフシティツァの警察を襲撃し、各地での蜂起に先立ち最初の銃弾を放った。しかし軍事力の差は甚だしく、反乱は速やかに鎮圧され、カブレシュコフも逮捕され獄中で自決する。



中庭から見たカブレシュコフ・ハウス。

カブレシュコフ・ハウスのプロヴディフ様式ファサード。

異邦人にとっては共感することが難しいけれど、25歳でその生涯を閉じた革命家は、苦難の末にトルコからの解放を勝ち取ったブルガリア人にとって、悲劇の英雄としてひときわ鮮やかに見えるのかもしれない。他のハウスミュージアムが閉じているのに、此処だけは開館されていたのはそのせいだろうか。

プロヴディフ様式ではあるものの、本場の豪商邸宅と較べれば簡素な建物だ。中庭を挟んで小屋があり、此処にいるオバサンから入場券（多分2Lv(110円)ぐらい）を買う。彼女は足早に庭を横切り、ハウスの照明スイッチをパチパチと点灯してから、「あとは自由に見てください。」と云い残し引き返していった。

カブレシュコフ・ハウス玄関階段のところに置かれた鉢。豚の頭を意識しているのか？

内部は簡素だけれど住んでみれば居心地の良さそうなところだ。しかし此処の展示で目玉といえるのは、カブレシュコフの来歴や遺品と四月蜂起に関するあれこれで、正直なところさっぱり面白くなかった。一通り部屋を見て廻るとそのまま退出する。

カブレシュコフ・ハウスからさらに南にあるリュトフ・ハウスを訪ねてみようと歩き始め、最初の辻で先ほどの日本女性がガイドブックの地図と首っ引きで来るのに出くわした。一応、「日本の方ですか？」と尋ね、頷くので、「カブレシュコフ・ハウスならあれですよ。」と振り返って門を指した。

彼女は口ごもるようにして礼を云いながらも、表情は冴えない。その心情を後からおもんみれば、ソフィアからの長距離バスに（他は村人ばかりで）ただ一人の旅人として乗り込み、延々2時間半のドライブで随分奥深いところに来たはずだったのに、そこで遭遇したのが冴えない日本人だったことに落胆したのか。せめて声をかけなければ良かったのかもしれない。

カブレシュコフ・ハウス前。右にカブレシュコフの銅像。後方にハウスと門。門に向かって歩いているのが日本人女性。

時刻は4時半近くなっていた。この村に泊まるのだろうから、もしもおなじホテル・カリナで顔を合わせることがあれば、晩飯ぐらい奢っても良いと思う。これはほぼあり得ないことだが、明日のソフィア行きバスはかなりの確率で一緒になりそうだ。

ホテル・カリナの庭5時18分。クリスマスツリーは宿オーナーの子供用らしいが、あれば何となく心楽しくなる。

それからなお1時間ほど村内を歩き廻り宿へ帰る。家族棟に人の気配はあるが、宿泊棟は相変わらず森閑としている。階下のPCでメールをチェックすると、ディミタールのメールを受信していた。朝メールで頼んだソフィアからリラ修道院までのバス情報だ。この夜も他者のいない宿を独占し、気分的に豊かな晩酌を楽しむ。静かに夜は更けていった。